



2026年4月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
29	30	31	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	1	2

住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8
 メディカルプライム日本橋小伝馬町3階
 TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

2026年5月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
26	27	28	29	30	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30



「今月の言葉」

努力する人は希望を語り
 怠ける人は不満を語る
 ~井上靖(作家)~

春、新しい一歩

今年も美しく咲いた桜々が道行く人を楽しませてくれています。花粉症でお辛い方も多い時期ですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

3月から4月はじめにかけては、卒業式や入学式、入社式などセレモニーが続く季節ですね。私も先日、娘の高校の卒業式に出席してまいりました。親としてさまざまな思いを抱く場面もありましたが、中学・高校の6年間を無遅刻・無欠席で通い続けたことは、何よりも尊く、心から誇らしく感じております。

思い返せば、娘が中学1年生として入学したころは、ちょうどコロナ禍の始まりでした。非常事態宣言により登校は叶わず、授業はしばらくオンラインとなりました。入学式も6月に延期され、誰も経験したことのない形で学校生活が始まりました。ようやく通学が再開されてからもしばらくは、全員マスク着用の分散登校が続きました。娘も精神的に不安定な時期があり、当初は私が毎朝、最寄り駅まで付き添って通っております。当時の心細そうな表情は、今でも忘れられません。

学業の面では決して順風満帆とは言えませんでした。多くの友人に恵まれ、部活はじめさまざまな行事に参加し、最後まで楽しく学校生活を送れたことは、きっとこれからの人生の大きな支えになることでしょう。そういえば、私も妻も高校3年間は皆勤賞でした。我が家はどうかや丈夫な体だけは取り柄といってよいかもかもしれません。

さて、その娘の卒業式の日、すなわち3月18日に、数学者の広中平祐さんが94歳で逝去されました。広中さんは、数学のノーベル賞とも称されるフィールズ賞を1970年に受賞された、日本を代表する数学者です。ハーバード大学や京都大学で長く教鞭をとられ、多くの業績を残されました。私が若い頃にはテレビにも出演され、一般にも広く知られた存在でしたが、近年はあまりお見かけする機会がなくなっていました。

私は中学生の頃、広中さんの自伝『学問の発見』を読み、大きな影響を受けました。行商をしていた父親から「勉強するな」と言われながらも、押し入れに隠れて勉強を続けた少年時代の話。京都大学での思索にふける日々。アメリカ留学中、英語ができずに悔しい思いをした経験——。ふんどし姿で海水浴をする写真や、「哲学の道」を歩く姿とともに、どれも鮮明に記憶に残っています。

一般診療	月	火	水	木	金	土	日
10:00-13:00	●	●	●	●	●	●	×
15:00-18:30	×	●	●	●	●	×	×

●9:00-12:30

今回あらためて読み返してみると、当時強く印象に残っていたエピソードは、実際には数行程度の簡潔な記述にすぎないことに気づき、少し意外な思いがしました。それでもなお、あの本が自分の中に残してくれたものの大きさは変わりません。

振り返ってみると、私は当時、自伝や自伝的小説を好んで読んでいました。北杜夫の『ドクトルマンボウ青春記』、井上靖の『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』、そして渡辺淳一の『白夜』シリーズ——。それらの物語には、まだ見ぬ未来へと続く道の気配があり、当時の自分の心を揺さぶっていたのだと思います。

私は決して出来の良い子どもではなく、次男ということもあって、進路について強く期待されたり、方向を定められたりすることはありませんでした。一方で兄は、長男であり幼い頃から優秀だったため、父から大きな期待を寄せられていました。父自身は理系の学問の道を歩み、大学で研究に携わっていましたので、兄にも同じ道を望んでいたようです。しかし兄は大学受験直前に文系へ進路を変え、そのまま大学に進学しました。卒業後は民間のシンクタンクで働き、第一線で活躍しています。

私自身は理系の道を進み医学部へ進学しましたが、医師になった当時、将来自分が開業医になるとは想像もしていませんでした。また父も、長男でありながら開業医であった祖父の跡を継がず、学問の道を選びました。こうして振り返ると、子どもというものは必ずしも親の思い描いた通りには歩まないものだと、あらためて感じます。

広中さんが『学問の発見』を書かれたのは五十代。今の私と同じくらいの年齢です。当時の自分が読んだときは、まったく違う視点でこの本を読み直していることにも気づかされました。

今この年齢になって思うのは、自分の進路は最終的には自分自身で選び、その歩んできた道はどのようなものであっても尊いということです。人生は、計画通りに進むことばかりではありません。むしろ、さまざまな出会いや偶然の積み重ねが、その人の未来を形づくっていくのではないのでしょうか。

4月は、新しい道へと踏み出す季節です。それぞれの場所で、それぞれの歩みが始まります。

その道の先に、思いがけない出会いと、振り返ったときに「この道でよかった」と思える瞬間が訪れることを、心より願っております。

文責 齋藤 幹